HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	近代ドイツの作家連盟(4)：ジャーナリストの場合
Author(s)	前原, 真吾
Citation	独語独文学科研究年報, 26, 1-18
Issue Date	1999-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/26115
Type	departmental bulletin paper
File Information	26_P1-18.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

近代ドイツの作家連盟（4）—— ジャーナリストの場合 ——

前原　真吾

1．貧困のジャーナリスト

雑誌“Die Grenzboten”の編集者として、つまりジャーナリストとして生計を立てていたグスタフ・フライタークの創作した市民喜劇『ジャーナリストたち』[1]が、1852年12月8日、ブレスラウにて試演された。この喜劇は作者フライタークにとって最初の大成功した演劇作品となり、その後も引き続いて世紀転換期にいたる頃まで、ドイツの舞台で頻繁に演じられることになった。またこのことによって、ジャーナリストという職業の存在を近代市民社会の象徴として世の中に知らしめ、何十年にもわたって、この職業についての印象と理念とを形造ることになった[2]。

劇中の登場人物の一人である大学教授のオルデンドルフは、同時にある地方都市の新聞“Union”紙の編集長でもある。この教授は、その地方での選挙において自由主義派の代表として立候補し、保守派の対立候補である軍人ラングと争うことになる。このラングの方には“Coriolan”という象徴的な名前を持つ保守派の新聞がついている。教授の方の協力者は“Union”紙の主任編集者で、この劇の主人公の青年ボルツである。ボルツはきわめて有能なジャーナリストであり、かつ哲学の博士でもある。彼は新聞を用いた世論操作の技術に熟達しており、最後にはオルデンドルフ教授を選挙において勝利させることができる。この成功の報酬としてボルツが手にするのは、美しい女地主アーデルハイドとの結婚で、この喜劇は彼女の喜びの叫びで幕を閉じるのである：“Die Braut eines Journalisten!”

このように喜劇『ジャーナリストたち』の中では、自由主義的なドイツ教養市民が就く職業の理想像として、ジャーナリストが褒め讃えられている。啓蒙的・人文主義的な学問の世界、自由主義的な新聞の発行、そして進歩的な政治姿勢と議員の肩書き、これらが一つのものとしてジャーナリストという存在の中で分かち難く結び付いているのである[3]。19世紀の中盤以降、ドイツで一般的となった市民的な「ジャーナリスト像」とは、おおよそこのようなものであったと考えることができるだろう。

さてそれでは、この輝かしいジャーナリストの肖像を念頭に置いたままで、次の言葉を読んでみることにしよう。いったいこれをどのようなものとして理解することが可能であろうか。

> 「私はこの世を去ることにする。なぜなら、もはや私は生きるためのものを何ひとつとして持っていないからだ。63歳になって財産もなく地位もない状態で、私は、精

神的にも肉体的にも労働する力を消耗してしまったのだ。私の前にあるのは、飢餓と貧困と恥辱の未来なのだ。」[4]

上のような言葉を残して本当に世を去ってしまったのは、金融恐慌で破産した企業経営者や投資家などではない。また失業したどこかの会社の従業員や工場労働者でもない。これはジャーナリストとして生涯を過ごしたある人間が、最後に書き残した言葉である。先のフライタークによるジャーナリスト像とは何と違っていることだろう。しかも、同様な貧窮状態に置かれていたのはこの遺書を書いた当人だけではなかった。ジャーナリストの老齢年金共済制度の設立が、1864年アイゼナハで開催された第1回目の全ドイツ・ジャーナリスト会議において、すでに重要議題として取り上げられている。ジャーナリストたちの間で貧困問題がどれほど一般的であったかを、ここから推し量ることができるはずである。

事の経過を簡単にたどると、こうである。まずアイゼナハ会議では、“Neue Frankfurter Zeitung”の編集者が老齢・遺児福祉についての講演を行ない、“Genossenschaft zur Altersversorgung der deutschen Journalisten”の創設案を提示した。加入できるのはジャーナリストを本業としている者だけ、加入者が60歳になったときから年金として受け取る分の基金については、3分の2をジャーナリストたちが、残りを出版人たちが負担することにしよう、という計画であった。そこでジャーナリスト会議内部に審議会が設けられ、創設案をいくつかの保険会社に鑑定させたのち、審議会でその鑑定書を検討して、これらの保険会社のうちの一つと契約を結ぶことになった。ところが、照会に対して各保険会社の出してきた条件がジャーナリスト会議の期待に添うものではなかったために、保険会社を利用してドイツのジャーナリスト全体のための制度を整える、という計画は3年で挫折に終わったのであった[5]。

その後の1868年第3回ベルリン会議において、当時ベルリン在住のジャーナリストであったマーロン博士は少し異なった主張を行なった。ジャーナリストの困窮問題はその報酬を改善することによってしか解決できず、また老齢福祉については個々の出版社の側で保険制度を設け、あるいは社員救済をせねばならない、というのである。この考え方に従って出版社による老齢福祉制度の設立に務めることが会議で決定され、以後さまざまな基金や保険制度の創設が試みられることになった。だが、長期的に見ると会議が主導したそれらの企画はどれも不首尾に終わっており[6]、またその具体的な原因も不明なままである。会議に参加するようなジャーナリストたちは比較的高収入であったため、問題に対して真剣に取り組まなかったのではないか、あるいは、長期間雇用した執筆者・編集者に対して大新聞だけが独自に年金を出していたからではないか、という推測もできなくはない[7]。とはいえ、マーロンの場合はこれらに当てはまらないのである。彼は、ドイツのジャーナリスト全体を対象とするような年金制度の設立には終始反対していたけれども、それは決して彼自身が裕福であったからではなかった。ジャーナリスト救済の制度が出来上がるまでに、あまりにも長い時間がかかることを恐れていたた

めであったのだ。そしてこの恐れは現実のものとなる。早急な救済を願っていたマーロンは、「財産もなく地位もない」、「飢餓と貧困と恥辱の未来」を目前にして、1883 年 1 月、ついに自分の妻を道連れに 63 歳で自殺してしまったのである。ベルリン会議での発言から 15 年後のことであった。また、この年を最後にジャーナリスト会議自体も消滅してしまった。いったいドイツのジャーナリストたちにはどのような事態が生じていたのか。

以降の章では、この会議消滅までの経過とその後の新たな組織活動の方向性をたどり、これをもとに、ジャーナリストという職業の歴史的な変化について若干の考察を行なうことにする。

2．ジャーナリストの全国組織

全ドイツ規模のジャーナリストの組織としては、1864 年に第 1 回目が開催されたドイツ・ジャーナリスト会議“Deutscher Journalistentag”が最初のものである。この会議は連盟や協会といった常設の組織ではなかったものの、文筆家・文芸作家の全国組織である“Allgemeiner Deutscher Schriftsteller-Verband”およびそれに付随して開催されることになったドイツ文筆家会議“Deutscher Schriftstellertag”と比べて、14 年も早くに創設されている[8]。このことから、「ペンで生きる」という同じ種類の活動でありながら、詩人や文芸作家よりもジャーナリストの方が自身の職業をめぐる全体的な社会状況に関して意識を持つのが早かったといえるし、また、ジャーナリストの方がそれだけ組織的な活動を行なう必要性に迫られていたともいえるであろう。これら双方の全国組織は後に互いに交錯していくことになるが、その過程は非常に分かりづらいため、年代順の一覧形式にしてまとめてある（本文末［年表］を参照）。以後はこれに従って論じていくことにしたい。

さて、ジャーナリスト会議が抱えていた問題については、三つの点から考えることができる。組織の構造、活動の実効性、そして外部との関係の三点である。

まず第一の点について、問題の所在は会議の規約を見るだけで明らかである。それは、実際に会員としての資格を持っていたのが人間ではなく各々の新聞や雑誌であったこと、文筆家や企業経営者である出版人がジャーナリストと同じ資格を持って参加していたこと、そして、会議が一年ごとにしか開催されなかったことである：

「Ⅰ.ドイツ・ジャーナリスト会議は、定期的に行なわれるドイツの新聞・雑誌の代表者の集会である。
Ⅱ.（略）
Ⅲ. ドイツ・ジャーナリスト会議は通常一年ごとに招集される。
Ⅳ. 会員となる資格を持つのは新聞・雑誌の編集者、寄稿者、発行者および出版者である。

V．どの新聞あるいは雑誌も一人または複数の代表を派遣できる。（中略）どの参加者も最高で三紙までの代表者となれる。（中略）採決に際しては、一つの同じ新聞の代表者たちが持つのはただ一票のみである。」[9]

規約Vは、新聞一紙につき投票権が一つ、ということであって、参加者である各個人に対して一票ずつが与えられるのではないことを意味している。おそらくここで意図されていたのは、大量のジャーナリストを抱える少数の大新聞だけが主導権を握ってしまうような事態を避ける、ということだったと思われるが、結局は個々のジャーナリストたちの発言権に大きな制約を加える機構となっている。また会議が年に一度、数日間しか開催されないというのも、組織的活動を行なうには非常に効率の悪い構造である。決議案を翌年度までに審議する委員会の設置、という形でこの弱点を補ってはいたものの、重要な経過報告や新たな問題への対応は、常に翌年の会議まで持ち越されていたのであった。

これらの構造上の不備は、第二の問題、組織活動の実効性という問題とも密接に関わっている。まず想像に難くないのは、出版人たちが自身に不利益をもたらしかねない会議の活動を牽制したであろう、ということである。また審議委員会の設置という方法のために、特定の計画を実行に移すことが時には何年間も延期されている。その好例が、独自の保険・年金制度や広告代理店、通信社の創設といった重要な計画の立ち消えである[10]。これらは結局実現しなかった。加えて、毎年会議では多くの決議がなされ、また帝国議会に対して請願書を送ったりもしてはいたが、この組織は実際にその要求を押し通すために必要な政治的手段を何も有してはいなかったのである[11]。

もちろん会議内には、このような組織構造と実効性の問題を解決しようという動きが存在していた。その中核となっていたのは、新聞・雑誌ではなく各地域のジャーナリスト協会やジャーナリスト個人に会員資格を与えることにしよう、という動きである。まず 1874 年バーデンバーデン会議では、組織の構造が批判の中心となった。“Posener Zeitung”の編集者であったヴァスナー博士によって改革の提案が行なわれ、特に新聞総会“Zeitungs-Congress”からジャーナリスト協会“Journalisten-Verein”への転換について動議が出されている。しかしこの時点では彼の動議は多数決で否決された。そこでこれに対する批判文が同年 7 月 25 日の“Berliner Tageblatt”紙上に掲載された。その筆者は、ジャーナリストの関心がないがしろにされている理由として、「ジャーナリスト会議の構成は統一的でなく、見たところジャーナリスト、文筆家および出版人といったような異なった集団を包含している」ということを挙げている[12]。

最初の重大な規約変更が行なわれたのは、1877 年ドレスデン会議でのことである。そこで決議されたのは、将来には個々の新聞・雑誌の他に、地域のジャーナリスト諸協会も会議の会員となり得る、ということであった[13]。ちなみに、この時点での存在が判明している地域協会は

次の五つだけである[14]：

Concordia Wien(1859)
Verein Berliner Presse(1862)
Verein Breslauer Presse(1871)
Journalisten- u.Schriftstellerverein für Hamburg, Altona und Umgebung(1872)
Frankfurter Journalisten- u. Schriftstellerverein(1875)
（数字は成立年を表す）

ようやく個々人を会員として受け入れることが可能になったのは、1881年フランクフルト会議での規約変更によってである。この新しい規約の第一項は次のようになっていた：

「ドイツ・ジャーナリスト会議はドイツの新聞とジャーナリストの協会であり、その目標は、
a) 職業上の利益を保護・促進すること、ジャーナリストたちの連帯を促進すること、個々の会員の権利をその侵害に対して擁護すること、
b) 貧窮、疾病、労働不能の際に支援を行なうこと、である」

この規約改訂には、実は他にも注目すべき点がある。それは、「新聞とジャーナリスト」という表現の前案として初めに計画されていた「ジャーナリストと文筆家」という表記が、会議で否決されて採用されなかったことである[15]。出版人を除外するだけでなく、文筆家からも完全に分離することが、ここで初めてジャーナリストによって宣言されたのであった。この大幅な前進を契機として、1883年アイゼナハ会議において新たに結成されたのが、常設の全国組織“Deutscher Journalistenverband”(DJV)である。

新しい連盟DJVには、最初からジャーナリストのための共済基金が付随していた。中心となる連盟基金の他に、従来までの反省を踏まえて、今度は実効性という点でも重要な役割を果たすべく、六つの地域（ベルリン、ハンブルク、ドレスデン、フランクフルト、ミュンヘン、ウィーンの各都市を中心地とする）で共済基金が同時に設立された。ところが、この連盟は設立後一年あまりで活動に支障をきたすことになる。その原因はジャーナリスト会議と他の組織との関係にあった。ここからが問題の第三点目である。まず1877年の決議をきっかけとして、上記の団体の他にも各都市・地域ごとの協会創設が活発になり始めていた。そして保険や年金など社会保障制度の確立が、次第にこれらの地域協会を基盤として行なわれるようになっていった。この傾向に決定的な方向づけを行なったのが、実は1883年の地域別共済基金の設置である。もちろん、たんなる地域協会の結成だけであったならばDJVにとって不都合なことは何もなかったはずであった。だが現実には、これが大きな障害となっていた。なぜかというと、これらの地域協会が、全国会議で採択された「文筆家との分離」ではなく、逆に連帯と交流と

を目標として掲げたからであった。上で挙げた五つの団体の他に、1878 年から 90 年までの間にジャーナリストの支援をうたって設立された地域協会で、その存在が判明しているものを挙げてみると、次のようになる[16]：

München Journalisten- und Schriftstellerverein(1881)
Bremer Journalistenverein(1883)
Dresdener Presse(1884)
Kranken-Unterstützungskasse Münchner Journalisten und Schriftsteller(1886)
Verein Leipziger Presse(1886)
Verband der deutschen Journalisten in Böhmen(1887)
Deutscher Journalisten-Verein für Schlesien und Mähren(1889)
Verein Berliner Berichterstatter(1890)
(1899 年以降は：Berliner Journalisten- und Schriftstellerverein)
Verein Thüringer Presse(1890)

ここでは個別に取り上げないが、1890 年代から世紀転換期頃まで、各地域・都市の協会はさらに数多く形成されていくことになる。そして、これらの協会はすべてジャーナリストと文筆家・文芸作家を抱き合わせで会員としていたのである。結局そこにジャーナリストのためだけの職業団体はほとんど存在しなかったといってよい。また、ジャーナリストの全国組織が活動を中断した 1883-84 年は、実は文筆家の最初の全国組織である“Allgemeiner Deutscher Schriftsteller-Verband”(ADSV) の活動最盛期であり、「ディレッタントを排斥して文筆家・作家を専門職として確立しよう」という気運が高まっていた時期にぴったり重なっている[17]。ここから推測できるのは、専業の文筆家・文芸作家だけでなく、これを兼業していた多くのジャーナリストたちもまた ADSV に代表される集団へと吸収されていったのではないか、そして、これに加わることのなかった「たんなるジャーナリストでしかない人間たち」の組織的な活動の領域が急速に狭められていったのではないか、ということである。ジャーナリストを文筆家・文芸作家の範疇に加えることができるのかどうか、それとも文筆活動の専門職化の前段階にある存在として、あるいはその領域外の存在として位置付けるべきであるのか、といった議論が、この時期に初めて文筆家たちの間で盛んに行なわれるようになっていたという事実は、この推測を裏付けるものであるといえよう。さらに付け加えるならば、このときジャーナリストに対する批判を行なった文筆家たちの意識の根底にあったのは、教養市民の理想的職業であるジャーナリスト、フライタークのジャーナリスト像と、眼前のジャーナリストたちの現実との間の大きな「落差」であった[18]。こういった時期に起きたのが、前述したマーロンの事件である。

このようにして、ジャーナリストたちの最初の全国的な組織活動はいったん後退することになる。上述の諸地域協会はもちろんジャーナリストを支援するものであったとはいえ、ジャー

ナリスト会議は 1883 年以降もはや開催されることがなく、またそこで結成された新しい連盟についても、何らかの活動がそれ以後に行なわれたという記録は残っていないのである。こうしてみると、ジャーナリスト会議はさほど考察に値する組織ではないように思われるかもしれない。事実、次世代のジャーナリストであったカイェタン・フロイントの見解では、「実際に新聞の知的・精神的な内容を決定していた人間たちのおよそ 80％はこの組織には参加しておらず、この組織をジャーナリストという職業の代表とは認めておらず、あるいはこの組織については全く気にも止めていなかった」という[19]。もちろんこれは言い過ぎで、有力紙の代表的な編集者が多数参加していたことは分かっている。しかし文化史・社会史的な観点からは、この組織が実際に成果を挙げたかどうかではなく、このような組織が結成されたというその歴史的事実にこそまず注目すべきである、という点を強調しておきたいと思う。

さて、その後しばらくの間、ジャーナリストの全国的な組織活動は文筆家の組織に取り込まれた形で行なわれていくことになる。初めはヨーゼフ・キュルシュナーらが ADSV から分裂して結成した“Deutscher Schriftsteller Verein”(DSchV)の中で[20]、またこれが ADSV と再び融合して“Deutscher Schriftsteller-Verband”(DSV) となった後は、この組織とは別に、各地に成立していたジャーナリスト・文筆家協会を総合する上部団体という形で 1892 年に創設された“Allgemeiner Deutscher Journalisten- und Schriftstellertag”の中で進められている。もちろんこの新しい会議も、その設立当初から旧ジャーナリスト会議と同じ問題を抱えていた。まず第一に、会員は個人ではなく各地域の文筆家・ジャーナリスト諸協会であった。また1887年ドレスデンを最後に開催されなくなっていたドイツ文筆家会議の再生ということも、ここで同時に目論まれていた。さらに、新聞・雑誌の代表者（つまり出版人など）も会議に参加できることになっていたのである[21]。

このようなモザイク状組織の次の段階は、やはり旧ジャーナリスト会議と同じく常設組織を結成することであった。1894 年に結成された“Verband deutscher Journalisten- und Schriftstellervereine”(VdJSchV) である[22]。だがこの連盟は、結成母体となった新会議と同様に、個人ではなく各地域の「ジャーナリスト・文筆家協会」が会員資格を持った点、および文筆家とジャーナリストが連帯していた点で、旧会議の結成した VDJ とは大きく異なっていた。その活動目的は：

「以下の点においてドイツのジャーナリストと文筆家に共通の法的・社会的な利益を守ること。
a) 著作権・出版権に関わるあらゆる問題において、
b) 新聞法・新聞刑法に関わるあらゆる問題において、
c) この身分の名誉保護、およびこれに関わる問題全般において、
d) 老齢・遺族福祉制度の拡大・促進において。」[23]

とされている。文筆家を排除したことで結果として不能となった旧会議・連盟への反省からであるとも考えられるが、ともあれ、VdJSchV は多数の地域協会を基盤としながら上記の目標を多面的に追求していくことになり、またこれ以後、ジャーナリスト・文筆家会議と VdJSchV の代表者（すなわち各地域協会の代表者たちが集まる）会議“Delegierten-Versammlung von VdJSchV”が、同等の存在として交互に開催されていくことになったのである。その VdJSchV の活動のうち、ここでは特に執筆活動そのものに関わる二つの問題、職場の確保と職業教育という問題に注目し、これを手がかりとしながら、ジャーナリストという職業が専門職化へと踏み出していった過程について考察を進めることにする[24]。

3．ジャーナリストの専門職化

文筆家とジャーナリストに対して就職先を斡旋する専用機関を設置しよう、という提案が初めて取り上げられたのは、1898 年ウィーン代表者会議でのことである。そして翌 99 年には、ベルリンに職場紹介のための事務局が設けられた。設置当初は、雇用する側である出版人や連盟会員である各協会が情報提供に際して非協力的であったために、うまく機能しなかった。このため 1901 年のアイゼナハ会議では、この事務局に対して、人材募集の広告を連盟機関紙“Das Recht der Feder”やその他専門誌に掲載する全権を委任することが決定されたが、しかし事態はそれほど改善されなかったという。またこれと同時に、ジャーナリストと出版人の関係についての実態調査を行なうことで、報酬その他に関わる雇用契約書の標準形式を作成することが決定された。作成された標準契約書は後に 1903 年のミュンヘン会議で正式に採用されている。内容は、長期間の雇用を保証する、短期間の疾病・拘留その他の障害を解雇事由としない、休暇と年金の請求、編集者と出版人の間の係争を調停する仲裁裁判所の設置、などといったものであった。しかしこの契約書は、中小新聞の出版社にとって不利であるとの理由から、新聞出版人協会“Verein Deutscher Zeitungsverleger”（1894 年結成）側には承認されなかった[25]。

編集者次第で自社の新聞・雑誌が廃刊に追い込まれることもある、という危険が出版人の側には常に存在していたことを考慮すると、この職場斡旋と雇用保証という試みが成功しなかった重大な原因の一つとして想定できるのは、現実に出版社に雇用される人間のジャーナリスト・編集者としての「技術・能力を保証する機関」の不在、という状況である。VdJSchV がジャーナリスト以外の要素を多分に含む組織であったことも計画頓挫の遠因となっていたはずではあるが、これを突き詰めると、逆にその組織の構造自体が、ジャーナリストという職業に就く資格を証明するものが存在しなかった結果として出来上がったものである、ともいえるわけである。この点について、ジャーナリストという職業に就こうとする、あるいはすでに就いている人々の職業人としての専門教育が問題だ、という提議が行なわれたのも、実は同じ 1898

年ウィーン会議でのことであった。たんに読み書きができるというだけでなく、専門知識と技能とを必要とする「立派な職業」としてジャーナリストを確立しなくては、という提案であった。だが、この問題は提案されただけで実際には何の決議もされず、以後も取り上げられることがなかった[26]。

このように、少なくとも職場の確保と職業教育という問題に関しては、VdJSchV およびその代表者会議が具体的な成果を挙げたとは言い難い。しかしながら、この時の状況を最初の連盟 DJV あるいは 1880 年代末に途絶した文筆家・文芸作家たちの活動時の状況と比較してみると[27]、そこには非常に興味深い相違点が見られるのである。まず一つは、同じ「ペンで生きる」職業の地位向上と質の改善を目指していたにもかかわらず、DJV あるいは ADSV、DSchV、DSV といった 1880 年代の組織には、文筆家・ジャーナリストへの職場紹介という機能が全く付与されていなかった、という点である。この機能は、おそらく世紀転換期になってようやく発案されたと考えられる。例えば、1900 年に新たに結成された全国組織の文筆家協会 “Allgemeiner Schriftsteller-Verein” (ASV) の目標修正などは、これを裏付けるものといえよう。ASV 結成当初の目標は「（文筆家という）身分の権益を促進する、訴訟事件の際に代理となる、文筆家を（経済的に）援助する、社交をはかる」のみであった。ところが 1905 年版になると、これに「複製出版の取り締まり、職場紹介」が追加される[28]。最後の項目の追加が VdJSchV の事務局設置とその権限拡大に刺激されてのことであると推測できるのである。それでは、なぜこの機能がそれほど注目に値するのかというと、それは、長期契約として紹介される職場というのが主として新聞・雑誌の編集者 “Redakteur” の地位だったからである[29]。そしてこの編集者という「職業」が、長年にわたるジャーナリストと文芸作家・文筆家の間の混乱状態に対して、一つの抜け道を用意する存在であったからである。

職業教育という点についての 1880 年代との状況の相違も、また「出版社に雇用された新聞の編集者」という職業に関係している。1912 年にシュトゥットガルトのヴィオレット出版社から、ギムナジウムなどの生徒向けと思われる『文筆家とジャーナリスト』という職業選択の案内書が刊行された[30]。この職業案内書によると、まず文筆家とジャーナリストという職業には原則として「学校などで手に入れられる資格証明のようなものはない。ただその能力だけが資格を与えてくれる唯一のもの」であり、また「文筆家とジャーナリストの間に境界線を引くことは不可能」である。話を編集者という職業に限ってみても、「必要となる知識や能力のすべてについて教えてくれるような大学は存在しない」という。もし 1880 年代に「ペンで生きる」職業を目指していたとしたら、職業訓練のための教育機関の案内はここで終わりであった。ところがこの本が出版された当時には、なんと、「すべてについて教えてくれる」わけではないが、「ジャーナリストや編集者が仕事をする際に知っておかねばならない専門領域を扱っている大学は存在している」というのである[31]。

この職業案内によると、そのような教育機関には二つの種類があった。まず一方は、ハイデ

ルベルク大学教授アドルフ・ロッホが、1893年にジャーナリズムの歴史・構造・技術などについての講義を行なったのが始まりである。その後、このロッホ教授を中心とした学者たちが次第に実践的な演習を加えていくことで内容を発展させ、1900年頃には、ハイデルベルクを拠点にドイツやスイス各地の大学で専門講座の授業が行なわれるまでになっている。またジャーナリスト養成のための教育綱領として『ジャーナリズムを学ぶ学生のための授業計画』"Lehrplan für Studierende der Journalistik" なるものがロッホ他数名により立案されている。内容は、各種法律についての講義と歴史・政治・経済・哲学等の一般教養科目に加え、編集部の構成や通信・報道など新聞制作の現場についての知識、そして現在でいうメディア研究や新聞学に相当する科目が盛り込まれている[32]。これが一般の大学を利用したジャーナリズムとジャーナリストへの道であった。

しかしながら、専門的な職業教育という点では上記のものはどちらかというと回り道であり、もう一つの教育機関の方がより直接的にジャーナリストという職業に結び付いていた。そのため、ここでは少し詳しくその実態に触れておきたいと思う。1899年に、自らもジャーナリストであったリヒャルト・ヴレーデ博士によってベルリンに創設されたその学校は、「ジャーナリスト大学」"Journalisten-Hochschule"という名称であった。職業案内書の著者は"Fachschule"と呼んでいるため、教育機関としての公式な分類は大学なのか高等専門学校なのか判別できない。しかし入学資格から判断すると大学と同等の教育機関と考えることができるだろう。またこの案内書による評価は非常に高く、「優れた専門教育を行なっているようだ。少なくとも、ここを出た学生のかなり多くがジャーナリズムの世界で良い職場を手に入れてきていることから、それは分かる」という[33]。その入学資格者は次のように規定されていた：

「a) 上級学校でアビトゥア（大学入学資格）を取得している者
b) 一年間ジャーナリストとして実務をこなしたという証明がある者
c) 十分な基礎知識がある女性」

校長ヴレーデの他に9人の講師が授業を行なっており、それぞれの講師の承認があれば、上記の他にも例外的に入学が認められた。逆に、基礎知識があまりに不充分な場合は入学が許可されなかった。また文筆家、書籍商、出版部門の役人、芸術家、俳優なども、関連する講義を聴講することが認められていた[34]。講義と演習の内容は次のように構成されており、半年ごとの単位を通常は2年間で履修することになっていた：

［講義］	単位数
1．新聞印刷の歴史と技術 ・・・・・・・・・・・・・・・・	1
2．ジャーナリズム入門 ・・・・・・・・・・・・・・・・・	2
3．著作権法および出版法 ・・・・・・・・・・・・・・・・	2

4．ジャーナリズムの解剖病理学 ・・・・・・・・・・・・・ 2
5．画報・絵入り雑誌 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
6．専門誌 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
7．新聞広告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

［演習］
8．ジャーナリズム実習 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
（新聞講読、題材入手、原稿編集、論争展開）
9．国家学・政治学演習 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
10. 美学演習 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
11. 文体・記述演習 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
12. 演劇批評 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
13. 小説批評 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
14. 音楽批評 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
15. 芸術批評 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
16. 報道特派員と通信員の職務 ・・・・・・・・・・・・・・ 2
17. 弁論術と記憶力 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
18. 速記術 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1 [35]

さらに 1910 年には、明確な試験規程が公示されている。これによると、以下の８科目の中から少なくとも２科目を選択し、論説・書評・簡単な記事などを二つ書くこと、また選択した試験科目と関係する新聞・雑誌の該当部分をまとめること、という筆記試験が行なわれた。口頭試験もあり、下記科目の他に一般科学、新聞の歴史と技術、著作権法・出版法についての試験が行なわれた：

1. 国家法・行政法およびドイツ政治
2. 国外の政治
3. 社会政策と国家学
4. 商業部門
5. 文芸欄
6. 地域報、時事報、雑報
7. 専門雑誌
8. 画報・絵入り雑誌 [36]

そして、この試験に合格して卒業すると、学位記 “Diplom” が授与されたという。つまりディプローム・ジャーナリストの誕生というわけである。例えばドイツの技術者が「ディプローム・エンジニア」という学位を持つことにより専門職化を果たしたことを考えるならば、これはドイツのジャーナリスト、あるいはより限定して、ドイツの編集者という職業が専門職化へと向かう大きな一歩であったといえよう。そしてジャーナリスト大学を創設したヴレーデが構想していたのが、まさにこの「編集者の専門職化」であった。彼は 1902 年、ドイツ編集者協会“Verein Deutscher Redakteure” (VDR) を結成し、次のような声明を機関紙 “Die Redaktion” 紙上で発表したのである：

「文筆家およびジャーナリスト、これはほとんどが編集者だが、この両者の利益を長期にわたって合致させ、一つの同じ団体の中で同時に代表しようとしても、それは不可能なことである。（中略）文筆家の利益と編集者の利益は、同じものであることも多いが、しかし、互いに全く違ったものであることも同様に多いのである。」[37]

当然のことながら、VDR の会員になる資格を持ったのはドイツで発行されている新聞・雑誌の編集に携わっている人間、もしくは、少なくとも入会申請が出される前年にそうであった人間に限られていた。また目標として掲げられていたのは「学術的な講演、専門科学に関する授業の導入、困窮している会員への援助、職場の紹介を行なうことによって、ドイツの編集者たちに共通の職業上の利益、また特に会員の個人的な利益を保護・促進すること」であった[38]。そして VDR が中心となり、ドイツの全ての編集者が参加できる「ドイツ編集者会議」が 1902 年から開催されることになったのである。

編集者という職業の専門職化が文筆家から完全に分離した形でここまで進むと、今後の発展が大いに気になるところである。しかしながら、この組織の挫折は意外に早く訪れた。そしてその主たる原因となったのはジャーナリスト大学の存在であった。まず、ジャーナリスト大学がすでに各新聞で編集者として勤務している人々と競合することになる、という批判が、特に協会外から発せられた。またこれに呼応するかのように、協会内部でも「ジャーナリスト大学のせいで我々の協会には敵がたくさん生じた」という批判の声が上がった。この批判を行なったのは、1905 年当時に協会の代表を務めていたヴァンゲンハイム男爵である。これに加えて彼は、ジャーナリストなどの自由業では後継者というものは需要と供給の間の自由な動きによって決まるべきだ、という意見を “Die Redaktion” 上で公開したのである[39]。これ以後、ヴレーデとヴァンゲンハイムの両者に代表される集団が反目を続けた結果、1905 年に 400 人を数えた会員数は 1908 年には 250 人に減少し、同年、分裂により VDR は消滅してしまった[40]。

さて、ヴァンゲンハイムに代表されるようなジャーナリスト大学への批判の背後には、ある種のジャーナリスト像の存在がうかがえる。それは、ジャーナリストの職業は教育で習得できるようなものではない、という考え方である。この当時、ジャーナリストの職業に対して一種の芸術家的なアウラを付与する機能を果たした「生来のジャーナリスト」という考え方は、多数のジャーナリストたちの間で非常に好んで用いられており、またジャーナリストの職業は習得できるものだという考え方は、そのアウラに傷をつけるだけであったのだ、という[41]。アウラはともかくとしても、常に文筆家・文芸作家たちの下位に置かれ、教養市民の中でも低く見られ続けてきたジャーナリストたちの「生来のジャーナリスト」への固執については、充分に理解できることである。現実の状態はどうであれ、少なくとも何か「天賦の才」のようなものがあることだけはその職業によって証明されるわけであり、教養と資格に基づいた、つまり習得可能な他の市民的専門職とは別格の存在であるという自負を持つことができたからである。つまり、理念としては文芸作家たちと同じ地位に就くことができたからである。しかし「天賦

の才」というその歪曲した思想は、実際には専門職化に行き詰まって教養市民の世界から弾き出された前世代の文芸作家たちの間から生まれてきたものであった。「普通の職業」に対する「教養市民の専門職」という選択が出来なくなった文芸作家たちは、世紀転換期からワイマール共和国の時代にかけて第三の選択肢「天才の天職」へと向かい、最終的にはあらゆる近代的・合理的・市民的な価値に対して反抗の姿勢を示す存在と化していたのである[42]。このように考えると、ジャーナリストの専門職化は結局のところ文筆家・文芸作家の存在によって足元から崩れ去ったのだ、ということができる。しかし、これは考えてみればすぐに分かることだが、画家、彫刻家や音楽家などの芸術家にこそ、まさにこれらを養成するための専門の教育機関の存在が不可欠となっている、というのが本当のところである。したがって「専門教育が不要＝芸術家的である」という想定は、実は大変な勘違いだったのではないのだろうかと思われてくるのである。

まとめ － プロフェッションとディレッタント －

振り返ってみると、ジャーナリストの組織活動が基本的に各地域の協会を中心として進められ、全国組織による主導がきわめて「ゆるい」ものであったということが、文筆家との職業上の分離・差異化の過程を大きく阻害し、その結果、ジャーナリストという職業が専門職として確立することを阻害するにいたった、といえるであろう。このことは、画期的な組織となるはずであった1883年のDJVの機能停止において、まず最初にはっきりと示されている。20世紀に入ってからも、ジャーナリストは教養市民的価値観と対立するようになっていた文筆家から容易には切り離されず、結局ここで取り上げた時代の範囲内では、他の教養市民的な専門職が獲得した安定した地位にまで到達することができなかった。

しかしながら、ほんの一時的にとはいえ、20世紀に入ろうとする時点でジャーナリズムの領域が専門職の世界として自立しようとしたことで、その時の文芸作家たちの世界がディレッタンティズムに彩られた領域として形成されていたことが、逆にはっきりと目につくことになる。すなわち、1880年代の文筆業の専門職化の試み、つまり裕福な教養市民の一角に場を占め、体制の中で中心的な身分になる、という試みに挫折した文芸作家たちは、敗残者然として田舎に引きこもったが、その後「専門的、合理的、知性的でありかつ体制側であること、つまりプロフェッションであること」に対立する存在として、文学や芸術に身を捧げるディレッタントとして、感性・直観を重んじる感覚の人として、市民の前に、とりわけジャーナリストたちの前に再び立ち現われたのであった。かつては合理的科学主義を標榜した自然主義の文芸作家や理論的評論家たちが、ベルリンに代表される大都市での挫折を経た後に、村落でボヘミアン生活を送りながら次第に非合理的な方向へと向かい、新たな同士を獲得しつつ、印象主義、新ロマ

ン主義へと進み、さらには多くの自然科学者たちをも巻き込みながら一元論的な神秘主義者へと変貌していったという事実は、このように近代市民社会における教養市民的職業の専門職化という歴史的過程と対比させることによって、たんなる文学史的な発展とは全く異なった様相を見せてくれるのである。それにしても、一度はディレッタントの排斥を叫んでいた人々が、十数年後にはディレッタント的存在であることに自らを託しているという結末は、実に皮肉であるといえよう。もちろん当事者たちは、「天才」として、自分がディレッタントであるなどということを認めはしないかもしれないが。

［年表］ドイツのジャーナリストおよび作家・文筆家の全国組織 一覧[43)]

- 1864年から1891年までは、左側がジャーナリスト会議開催地、中央は文筆家会議開催地、右側は連盟・協会形態の全国組織の結成その他を示している。
- 1887年以降は1892年まで、全国会議は開催されていない。
- 1892年からは、新たに「全ドイツ・ジャーナリスト・文筆家会議」（左側）が、1895年には「VdJSchV代表者集会」（右側）が創設され、これらが交互に開催された。1900年以後は代表者会議のみが、1910年まで主としてジャーナリストのための機関として開催されている。

	Deutscher Journalistentag	Deutscher Schriftstellertag	Verband / Verein (全国組織)
1864年:	アイゼナハ	----------	
1865年:	ライプツィヒ	----------	
1868年:	ベルリン	----------	
1869年:	ウィーン	----------	
1870年:	フランクフルト a.M.	----------	
1871年:	ブレスラウ	----------	
1872年:	ミュンヘン	----------	
1873年:	ハンブルク	----------	
1874年:	バーデンバーデン	----------	
1875年:	ブレーメン	----------	
1876年:	ヴュルツブルク	----------	
1877年:	ドレスデン	----------	
1878年:	グラーツ	----------	ADSV 結成
1879年:	アイゼナハ	ドレスデン	
1880年:	----------	ワイマール	
1881年:	フランクフルト a.M.	ウィーン	
1882年:	（開催地は不明）	ブラウンシュヴァイク	
1883年:	アイゼナハ	ダルムシュタット	DJV 結成 (停止)
1884年:	----------	シャンダウ	
1885年:	----------	ベルリン	DSchV (ADSV から分裂)
1886年:	----------	アイゼナハ	

1887年:	----------	ドレスデン	DSV (DSchV とADSC 融合)
1888年:	(～ 休止期 ～)		
1889年:	(～ 休止期 ～)		
1890年:	(～ 休止期 ～)		
1891年:	(～ 休止期 ～)		

	Allg.Dt.Journalisten- u. Schriftstellertag	Delegierten-Versammlung von VdJSchV	
1892年:	ドレスデン	----------	DSV (停止？)
1893年:	ミュンヘン	----------	
1894年:	ハンブルク	----------	VdJSchV 結成
1895年:	ハイデルベルク	ライプツィヒ	
1896年:	----------	フランクフルト a.M.	
1897年:	ライプツィヒ	----------	
1898年:	----------	ウィーン	
1899年:	チューリヒ	----------	
1900年:	マインツ	----------	ASV 結成
1901年:	----------	アイゼナハ	
1902年:	----------	ベルリン	VDR 結成

[略称] ADSV = Allgemeiner Deutscher Schriftsteller-Verband
DJV = Deutscher Journalistenverband
DSchV = Deutscher Schriftsteller Verein
DSV = Deutscher Schriftsteller-Verband
VdJSchV = Verband deutscher Journalisten- und Schriftstellervereine
ASV = Allgemeiner Schriftsteller-Verein
VDR = Verein Deutscher Redakteure

注釈

1) "Die Journalisten. Lustspiel in vier Akten(Prosa)" 初演は1852年、初版は1854年ライプツィヒ。フライタークは博士号を取得して私講師として大学で講義を行なったこともあったが、大学を離れた後はジャーナリストとして生計を立て、1848年から1870年ころまで "Die Grenzboten" の中心的な編集者の一人として活動していた。

2) 文章を書くという職業の存在そのものが19世紀前半にはあまり世に知られてはいなかった、という点に関して、前原真吾：近代ドイツの作家連盟（3）「ペンで生きる」職業は一つか？ -In: 独語独文学科研究年報 第25号, 北海道大学ドイツ語学·文学研究会 1998, 48ページ(注釈21)を参照のこと。

3) Vgl. Hübinger, Gangolf: "Journalist" und "Literat". Vom Bildungsbürger zum Intellektuellen. -In: Hübinger, G. / Mommsen, W.J.[Hg.]: Intellektuelle im

Deutschen Kaiserreich, Fischer, Frankfurt a.M. 1993, S.95

4) Brückmann, Ariane: Journalistische Berufsorganisationen in Deutschland. Von den Anfängen bis zur Gründung des Reichsverbandes der Deutschen Presse, Böhlau, Köln 1997, S.41 (Spiethoff, Gustgav: Die Großmacht Presse und das deutsche Schriftsteller-Elend. Ein Wort an alle Zeitungs-Verleger und Literaten Deutschlands aus Anlaß des Falls Dr.Maron in Berlin, Düsseldorf 1883, S.46)

5) Ebd. S.40-42

6) Ebd. S.43

7) Requate, Jörg: Journalismus als Beruf, Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen 1995, S.220

8) ここで資料として用いている年鑑 Deutscher Litteratur Kalender の各号では、ジャーナリスト会議ではなく Deutscher Journalistenverband の創設が 1863-64 年であると記されている。しかし後で見るようにこの連盟の創立は 1883 年である。

9) Statut des Deutschen Journalistentags. -In: Brückmann S.156-157

10) 通信社の問題とジャーナリスト会議については、前原(1998) 41-42 ページを参照のこと。

11) Brückmann S.56

12) Ebd. S.52-53

13) Ebd. S.53 「将来には」とは、まだ当時は精力的な活動を行なっていた地域団体の数が非常に少なかったからであると思われる。

14) Kürschner, Joseph[Hg.]: Deutscher Litteraturkalender auf das Jahr 1884, Stuttgart 1884, S.75-116

15) Brückmann S.53 (XV. Deutscher Journalistentag. Fortsetzung. -In: Frankfurter Zeitung vom 7.Juni 1881, Morgenblatt)

16) Kürschner(1884) S.75-116; Kürschner, J.[Hg.]: Deutscher Litteratur Kalender auf das Jahr 1890, Stuttgart 1890, Sp.39-50

17) ADSV の変遷とその問題および文筆業の専門職化については、前原真吾：近代ドイツの作家連盟 (1) 十九世紀ドイツ帝国におけるその成立の社会的背景. -In: 独語独文学科研究年報 第 23 号, 北海道大学ドイツ語学･文学研究会 1996, 36-39 ページ、45-48 ページを参照のこと。

18) 当時の文筆家・文芸作家たちのジャーナリストに対する態度については、前原(1998) 35-44 ページを参照のこと。

19) Freund, Cajetan: Die berufsvereine des deutschen Journalismus. -In: Francke, E./ Lotz, W.[Hg.]: Die geistigen Arbeiter, 2.Teil, Journalisten und Bildende Künstler, München 1922, S.63-120, hier S.70. フロイントは "Münchner Zeitung" の編集者であった。

20) ADSV および後の DSV とは異なり、DSchV は規約に「ジャーナリストを会員にする」と明記していた。前原(1996) 38 ページ参照。

21) Kürschner,J.[Hg.]: Deutscher Litteratur Kalender auf das Jahr 1893, Stuttgart 1893, Sp.29-31. 立案者の中には、旧ジャーナリスト会議参加者の他に、キュルシュ

ナーら DSchV の主導者たちが名前を連ねていることから、「会員以外の利権は保護しない」としていた DSV に対抗する意図を持って結成されたことが推測できる。

22) 連盟成立の直接のきっかけは、1894 年ライプツィヒを中心として結成された新聞出版人の協会“Verein Deutscher Zeitungsverleger”への対抗意識であるという。Vgl. Brückmann S.81

23) Kürschner, J.[Hg.]: Deutscher Litteratur Kalender auf das Jahr 1897, Leipzig 1897, Sp.11-12

24) その他の活動についてはここで簡単に述べておく。VdJSchV の構成基盤となった各地域の協会は、朗読会や批評会などの文学的催し、社交、祝典などといった活動の他に、主として福利厚生を行なう救済機関としての役割を、十分ではなかったとはいえかなりうまく果たしていた、とカイェタン・フロイントは報告している。Vgl. Freund S.69. また法的な問題については、VdJSchV が、新聞法違反に対する「移動法廷制度の撤廃」と「時効制度の確立」を要求し、部分的には成果を挙げている。移動法廷とは州境を越えて処罰を適用されることである。その他には、当局・法曹側による帝国新聞法条文の恣意的解釈を禁じるべし、という訴えも認められている。Vgl. Brückmann S.91-92

25) Brückmann S.88-90. 本論注 22 も参照のこと。

26) Ebd. S.86

27) 前原(1996) 36-39 ページ、45-48 ページ参照。

28) Kürschner, J.[Hg.]: Deutscher Litteratur Kalender auf das Jahr 1902, Leipzig 1902, Sp.12-13; Kron, Friedhelm: Schriftsteller und Schriftstellerverbände. Schriftstellerberuf und Interessenpolitik 1842-1973, J.B.Metzler, Stuttgart 1976, S.35-36

29) または出版社と雇用関係にある常任寄稿者の地位。新聞の出版人が「詩人」あるいは「劇作家」を常勤として雇用したとしても、それは情報を集めて報道記事や評論を書き、あるいは紙面を編集する人間として、つまり編集者として雇用しているのであって、決して詩人や劇作家として紙上で活躍してもらうためではない。雇用関係にある間は、文芸欄の担当者でさえ身分は編集者である。20 世紀初頭にはすでに「多くの文筆家は書評・劇評を扱うが、こういった文学活動は現在の状況下では文筆家の仕事の本質的部分と見なすことは出来ない。批評は、新聞の編集者や常任の寄稿者によって、片手間に、しかもほとんどの場合は報酬なしで書かれている。報酬を貰う場合でも、それは全く割に合わないものだ」という。Vgl.Streißler S.12（本論の注釈 30 を参照）

30) Streißler, Friedrich: Der Schriftsteller und Journalist. Eine Darstellung des Werdegangs, der Bildungsmöglichkeiten, des Erwerbes und der Aussichten in literarischen Berufen, Wilhelm Violet(Verlag), Stuttgart 1912

31) Ebd. S.4,16,17-18

32) Ebd. S.19-21

33) Ebd. S.21. この「職業案内」の評価とは矛盾する見解を示しているのが、Requate S.234 および Brückmann S.114 である。どちらもこの「ジャーナリスト大学」が大失敗であり、数年で消滅したのではないか、としている。だが少なくともこの職業案

内が出版された 1912 年には、まだ存続していたことは間違いない。筆者自身は、第一次大戦中・後の混乱期になくなったのではないかと推測している。

34) Streißler S.21

35) Ebd. S.22

36) Ebd. S.23-24

37) Brückmann S.101

38) Ebd. S.178-179

39) Ebd. S.115

40) Ebd. S.117-118. 翌 1909 年にヴレーデを中心として再結成されるが、それがどのような結末をたどることになったのかは明らかではない。

41) Requate S.234.

42) 前原真吾: 近代ドイツの作家連盟 (2) 考察の理論的背景について. -In: 独語独文学科研究年報 第 24 号, 北海道大学ドイツ語学·文学研究会 1997、特に 47-48 ページを参照。もちろんすべての文芸作家たちがそうなった、というわけではない。しかし 1880 年代に教養市民的な専門職化を目指したまさにその同じ人間たちが、十数年後には全くそれらとは相容れない存在と化していた、ということは事実として指摘せねばならない。

43) 年表作成には、Kürschner, J.[Hg.]: Deutscher Litteratur Kalender の 1887-90, 92-95, 97-99, 1901-02 年度版の他に、次のものを利用した：Brückmann S.35,77,82; Hellge, Manfred: Der Verleger Wilhelm Friedrich und das "Magazin für die Literatur des In- und Auslandes". Ein Beitrag zur Literatur- und Verlagsgeschichte des frühen Naturalismus in Deutschland. Buchhändler-Vereinigung GmbH., Frankfurt am Main 1977, Sp.1041

(博士後期課程)